

## ポーシャさん＝平田信さんへ

もう出てこれたらいいのに、何にこだわっているのか、一と思う。

1995年、弁護したオウム幹部の中には、警視庁の留置場でまさにしばらくぶりに母に会えた人がいた。もちろん、ポーシャさんも知っている人です。そりゃ、オウムの教義ではただ親子というだけであり、真理を極める道に反対しているならば、逆縁とされた。

でも、後に、あの時、母に会えて本当に良かったと言っていた。老いた母は、緩やかな角度の車椅子でなんとか接見室に入れたとのこと。アクリル板越しだから手は握れないけれど。もう少しで亡くなるだろう事から、最後に会える機会だった。亡くなった後、何とか会えてよかったね、との言葉以外かけようがなかった。共犯とはいえ人を殺した重さを感じるしかなかっただろう。

受刑中に、父のガンが再発し、出所に間に合わないのではと心配された人もいた。ポーシャさんも知っていると思う。1995年逮捕された時に実に何年ぶりかで会えた。母は出家中に亡くなっていた。お父さんは、本人が遠い刑務所に行った後も月に一回ぐらいは面会に行っていた。そしてガンが再発した。仮釈放を私からも求めたがとうとう認められず、なんとか命を持たせた。お父さんは頑張った。出所して初めてアクリル板越しでなく会えた。お父さんは、数ヶ月で亡くなった。少しの時間だったけれど、看病ができて本当に、本当に、良かった。

1995年、子どもが逮捕されて喜んだ親が何人も居た、とても重い処罰が予想されても、逮捕されればもうこれ以上、悪いことをしないで済む。自分の子どもが人の命を奪うを止めることができる。やがて、麻原さんの桎梏から逃れ親と会えた。話ができた。未だにアクリル板越しだけれど、会える。もちろん、ポーシャさんもよく知っている人。

親が、自分の子どもが逮捕されて喜ぶなんて、あまりに悲しかった。

衆生の済度とか、言ってみたって、  
たとえ逆縁であっても縁ある自分の親の顔を、

今死にいくお父さんの顔を見ることができなくて、  
なんで済度なんだろう。

そんなポーシャさんの人生って何なんだろう、  
お父さんの人生って何だったんだろう。

逮捕された後に、色々な調べがあるけれど、まあオウムサティアンでの生活、ワークのきつさに比べれば、実はどうってことないさ。調べが終わった後は、改めて長い時間をかけて自分に向き合わなければならないけれど、それは仕方がないこと。

麻原さんがこれは言うとおおり、人は生まれたときから死に向かっている。  
誰でも死刑判決を受けている。

もし現世が湖面に映る虚像だったならばおそれることは無い筈、いろんなことにこだわることも無い筈。

もし現世が、大切な一つの命だったならば、お父さんの命も大切な一つの命であり、かけがいが無いものの筈。

いま、ポーシャさんは、お父さんを喜ばすことができる立場  
集中治療室にいても、意識が危なくても、手を逃げれば握り返してくれたりするものさ。

アクリル板越しのお父さんでもなく、死んだ後に墓石に向かうのではなく、  
今なら生きているお父さんに、直接会える。

警察も、そんな時、少しの時間だろうけれど見守ってくれるものです。

お父さん、待っていると思う。どうか、どうか行ってあげてください。

[http://www.bnn-s.com/bnn/bnnMain?news\\_genre=2&news\\_cd=220011027912](http://www.bnn-s.com/bnn/bnnMain?news_genre=2&news_cd=220011027912)

上記のサイトより、その一部

>05月18日(木)16時12分

>父危篤で入院

>平田容疑者の父は、現在、末期がんで札幌市豊平区の

>とある病院に入院している。

>先週末、危篤状態に陥り、集中治療室に入っている。

# マヌ法典と仏典の類似性

最近、マヌ法典という昔のインドの聖典を読みました。マヌ法典というのは紀元前200年～紀元後200年頃成立したといわれていて、バラモン教徒の規範としてまとめられた法典です。一二章から成り、諸儀礼・日々の行事・カースト義務などを定めています。また、この法典は長くインド人の生活規範となっていました。これは仏教の經典ではないのですが、読んでみると仏典と似たような記述があることに気づきました。それらを列挙し比較してみようと思います。マヌ法典は渡瀬信之訳『マヌ法典』を、仏典は最も古いお経といわれるスッタニパータ（中村元訳『ブッダのことば』）を参照しました。

## ①大食について

マヌ法典から

二・五七 大食は健康、長寿、天界、果報をもたらさず、また世間の憎しみを買う。それゆえにそれを避けるべし。（『マヌ法典』 p50）

スッタニパータから

七〇七 腹を減らして、食物を節し、少欲であって、食ることなかれ。かれは貪り食う欲望に厭きて、無欲であり、安らぎに帰している。（『ブッダのことば』 p153）

## ②女性について

マヌ法典から

二・二一三 この世で男を墮落させることが女の本性である。それゆえに賢者たちは女たちに心を許さない。（『マヌ法典』 p73）

二・二一四 女たちは、この世において愚者のみか賢者をも愛欲と怒りの力に屈服させ、悪の道に導くことができる。（『マヌ法典』 p74）

スッタニパータから

一〇六 「女に溺れ、酒にひたり、賭博に耽り、得るにしたがって得たものをその度ごとに失う人がいる、——これは破滅への門である。」（『ブッダのことば』 p30）

### ③感官の対象への執着について

マヌ法典から

四・一六 欲望からいかなる感官の対象にも執着してはならない。それらに執着し過ぎないように意志によって抑制すべし。（『マヌ法典』 p125）

スッタニパータから

六五五 熱心な修行と清らかな行いと感官の制御と自制と、——これによって〈バラモン〉となる。これが最上のバラモンの境地である。（『ブッダのことば』 p141）

### ④独りになることについて

マヌ法典から

四・二五八 常に、独りで、人気のない場所で、自身に繁栄をもたらす事柄について考えるべし。なぜならば、独りで考えるとき、最高の至福を獲得するからである。（『マヌ法典』 p159）

六・四二 同伴者を持たず、成就を求めて常に独りで行動すべし。孤独者に成就があることを見る者は〔何ものも〕捨てないし、また〔何ものによっても〕捨てられない。（『マヌ法典』 p192）

スッタニパータから

七一八 独り坐することと〈道の人〉に奉仕することとを学べ。聖者の道は独り居ることであると説かれている。独り居てこそ楽しめるであろう。（『ブッダのことば』 p155）

### ⑤論争について

マヌ法典から

四・一三九 良いことは良いと言うべし。あるいは〔たとえ良くないことでも〕良いと言うべし。誰とも無益な反目をしてはならない。論争をしてはならない。（『マヌ法典』 p143）

スッタニパータから

八二八 これらの論争が諸々の修行者の間に起こると、これらの人々には得意と失意とがある。ひとはこれを見て論争をやめるべきである。称讃を得ること

以外には他に、なんの役にも立たないからである。（『ブッダのことば』  
p184）

八四五 竜（修行完成者）は諸々の（偏見）を離れて世間を遍歴するのであるから、それらに固執して論争してはならない。たとえば汚れから生える、茎に棘のある蓮が、水にも泥にも汚されないように、そのように聖者は平安を説く者であって、食ることなく、欲望にも世間にも汚されることがない（『ブッダのことば』 p187）

#### ⑥ 苦しみについて

マヌ法典から

六・六二 愛する者との別離、好ましくない者との結合、老いの支配、病の苦しみを〔見つめるべし〕。（『マヌ法典』 p194）

スッタニパータから

八〇七 夢の中で会った人でも、目がさめたならば、もはやかれを見ることができない。それと同じく、愛した人でも死んでこの世を去ったならば、もはや再び見ることができない。（『ブッダのことば』 p181）

#### ⑦ 身体に対する不浄観について

マヌ法典から

六・七六 骨を支柱とし、腱で結ばれ、肉と血を漆喰とし、皮膚に覆われ、悪臭を放ち、糞尿に満ち、

六・七七 老いと悲しみに占領され、病の座所であり、苦に悩まされ、ラジャス質に満ち、そして無常なこの物質要素の住処（身体）を遺棄すべし。（『マヌ法典』 p196）

スッタニパータから

一九四 身体は、骨と筋とによってつながれ、深皮と肉とで塗られ、表皮に覆われていて、ありのままに見られることがない。

一九五 身体は腸に充ち、胃に充ち、肝臓の塊・膀胱・心臓・肺臓・腎臓・脾臓あり、

一九六 鼻汁・粘液・汗・脂肪・血・関節液・胆汁・膏がある。

一九七 またその九つの孔からは、つねに不浄物が流れ出る。眼からは目やに、耳からは耳垢、

- 一九八 鼻からは鼻汁、口からは或るときは胆汁を吐き、或るときは痰を吐く。全身からは汗と垢とを排泄する。
- 一九九 またその頭（頭蓋骨）は空洞であり、脳髄にみちている。しかるに愚か者は無明に誘われて、身体を清らかなものだと思います。（『ブッダのことば』 p46）
- 二〇五 人間のこの身体は、不浄で、悪臭を放ち、（花や香を以って）まもられている。種々の汚物が充満し、ここかしこから流れ出ている。（『ブッダのことば』 p47）

#### ⑧尊敬されることと軽蔑されることについて

マヌ法典から

- 二・一六二 ブラフマナは、常に、尊敬を毒のように恐れるべし。そして常に蔑視を甘露（アムリタ）のごとくに望むべし。（『マヌ法典』 p66）

スッタニパータから

- 三四二 無相のおもいを修せよ。心にひそむ傲慢をすてよ。そうすれば汝は傲慢をほろぼして、心静まったものとして日を送るであろう。（『ブッダのことば』 p71）
- 三六六 修行者が、『かれはわれを拝む』と思って高ぶることなく、罵られても心にふくむことなく、他人から食物を与えられたからとて驕ることがないならば、かれは正しく世の中を遍歴するだろう。（『ブッダのことば』 p76）
- 七〇二 村にあっては、罵られても、敬礼されても、平然とした態度で臨め。（罵られても）こころに怒らないように注意し、（敬礼されても）冷静に、高ぶらずにふるまえ。（『ブッダのことば』 p153）
- 九二八 修行者は、非難されても、くよくよしてはならない。称讃されても、高ぶってはならない。食欲と慳みと怒りと悪口とを除き去れ。（『ブッダのことば』 p202）

『スッタニパータ』の三四二の「心にひそむ傲慢をすてよ」というところを挙げたのは尊敬されることから知らず知らずのうちに傲慢さが生じるからで、マヌ法典に書いてあるように尊敬を毒のように恐れていれば傲慢にもならないと思ったからです。

マヌ法典の「蔑視を甘露（アムリタ）のごとくに望むべし」というところはヒンドゥー教のシヴァ派の中の一つで最も古いパーシュパタ派と共通するものがあります。橋本泰元・宮本久義・山下博司『ヒンドゥー教の事典』から引用すると、「パーシュ



パタ派の行者たちは、屍を焼いた灰を身体に塗りつけ、人間の頭蓋骨を食器の代わりに用い、公衆の面前で奇声を発し、笑い、あるいは歌い踊ったりしながら、人々の侮蔑・嘲笑の中、宗教的实践に励んだという。これらは、シヴァ神自身の怪奇なイメージを反映するものでもあるが、何より、常軌を逸した行為により蔑まれることを一種の苦行と見なし、その中に法悦や聖なる境地を見出したのである。」（p181）

まさに彼らはマヌ法典に書かれている「蔑視を甘露のごとくに望むべし」を実践していたのではないのでしょうか。そこまで実践しなくても、この『マヌ法典』の「尊敬を毒のように恐れるべし。そして常に蔑視を甘露（アムリタ）のごとくに望むべし。」という言葉の心どこかに留めておくだけで日常生活を楽な気持ちで生きられるような気がします。

オウムでもサマナの頃はまじめにやっていた人でも、師になって人の上にたち、偉そうに振る舞うようになり、尊敬を受けるようになると傲慢になり、そのうち性欲の破戒なんかして挫折していく人たちがたくさんいましたね。こういう例を考えると、マヌ法典の「尊敬を毒のように恐れるべし」という部分がすごく納得できますね。また私はプライドが高く、人から低い扱いを受けるとすごく気になって、ずっとひきずることが多かったのですが、マヌ法典の「蔑視を甘露（アムリタ）のごとくに望むべし」という言葉を読んで、すごく気持ちが楽になりましたね。また今ではそういう場面にいくわしてもパーシュパタ派のようにわざとやるくらいじゃないとダメなんだと思えるようになりました。

また身体の不浄観については、仏教特有の考え方だと思っていたのですが、マヌ法典にも似たようなことが書かれていてちょっと意外に思いました。これはオウムでも身体を解剖学的に観察しなさいと言っていましたね。

以上のように仏典とマヌ法典を比較してみるとずいぶん似ているところがありますね。どちらかからの影響だったのかもしれないし、あるいはもともと当時のインドでこのような共通の思想があったのかもしれないですね。

#### 参考文献

渡瀬信之訳『マヌ法典』中公文庫

中村元訳『ブッダのことば』岩波文庫

橋本泰元・宮本久義・山下博司『ヒンドゥー教の事典』東京堂出版

# 『 今、思うこと 』

2006. 5. 3 元サマナ 女性

先日、某大学の心理学関係の講義を受講しました。

講義の中で、10年位前に青物横丁駅で医師が射殺された事件の話が出ました。（統合失調症の犯人が、被害者の手術を受けた際に体内にボビンを埋め込まれたと妄想したそうです。体内のボビンからカラカラと糸が出て、身体の中を糸が何重にも絡まり、犯人の心はその妄想に耐えられなくなり、医師を銃で射殺したという事件です。）

講義を受講していた人のほとんどの人は、この事件を覚えていませんでした。私にはあの時、テレビで見た事件だ・・・と鮮明に思い浮かびました。オウムのサティアンから最後に逃げ出したあの夜、オウムに捕まったら二度と日の光を見られないと私は必死でした。

泥だらけ、傷だらけになりながら、上九一色村の一軒の家のドアを叩きました。「助けてください！助けてください！」と。その家のドアは開かず、男の人の声で「あっちへ行ってくれ！」と言われました。どうしようかと思いつつ、私は暗闇の中、また沢山の木々や草の中を走りました。

すると、足元の地面が急になくなり、空の用水路(?)に落ちこみました。絶望的になりながら、斜面を這い上がると目の前に家がありました。その瞬間、犬が吠えながら飛び掛かってきました。あ～噛まれる！と思い、目をつぶった瞬間に男の人が大声で犬を静止してくれました。

恐る恐る目を開けると、その家のご主人が立っていました。私から事情を聞くと、家に入れてくれました。奥様は泥だらけの私の服を見て、自分の服をくれました。

お腹が空いているだろう・・・と暖かいおにぎりを作ってくれました。私はおにぎりを食べながら、ふっとテレビを見ると青物横丁駅で医師が射殺されたというニュースが映し出されていました。

半年ぶりに見た現世の映像でした。

講義を聴きながら、私は沢山の人の助けられ、今こうして普通の生活ができていくことに改めて感謝しました。上九一色村の優しい暖かい人たち、命を掛けて私と子どもを守ってくれた滝本弁護士さん、オウムから戻った私を涙を流しながら迎えてくれた家族や友達、沢山の人の顔が思い浮かびました。



今、北朝鮮に拉致された横田めぐみさん達に関するニュースが多く流れています。私は独房やコンテナで3ヶ月過ごしただけで、もう戻れないと気が狂いそうになりました。

横田めぐみさん達は、海の向こうの国で、何十年も帰れずにいます。

日本で普通の生活を送れるようになってほしいと心から思います。

皆があきらめないこと、必ず戻れると信じるのが大切だと思います。

以 上

---

---

## オウムの子供たちの学力

オウムの子供たちって学校教育受けてなくて、勉強遅れていたと言われていますが、結構難しい言葉とか知っていて驚いたことがあります。

あるとき、女の子とちょっとふざけて遊んでいたとき、その子のおなかをちょっと触ったら、その子が「邪淫！邪淫！」と言っていたことがありました。

また、私が子供班の色鉛筆をちょっと借りて使っていたことがあったのですが、私はちゃんと返していたのですが、その頃、色鉛筆が何本かなくなっていたらしく、子供たちは、それが私のせいだと誤解していたようなのです。それである男の子が私に「偷盗マン！」と言っていたことがありましたね。

「邪淫」にしろ「偷盗」にしろ、大人でもなかなか知らない言葉ですよ。オウムの教義だけは子供たちにちゃんと教えていたのかもしれませんがね。

元サマナ

## 室井 佑 月

最近人気のある小説家で室井佑月さんという方がいます。テレビのバラエティー番組なんかにもときどき出ているので知っている方も多いのではないのでしょうか？

この方は元レースクイーンや銀座のクラブホステスだった経歴の持ち主で、テレビでも恋愛に関する過激な発言をするのがうけているみたいですね。彼女がホステス時代、小説家の客がまわりからちやほやされているのを見て、自分もちやほやされたいと思って小説家を目指したんだそうです。学生時代の国語の成績はというと、10段階評価の2だったそうで、最初は句読点の打ち方から勉強したんだそうです。

この人のテレビでの発言を聞いているとなかなかするどいなと思うことがあるんですよね。例えば、こんなことを言ってました。「セックスって本質的にどういう意味があるんだろう。汚いところと汚いところをこすりあわせてるだけじゃん。キスなんかだって口の中はばい菌だらけでほんとうはすごく汚いんだよ。」

とか あとは「死にたいって思っていた時期があって、食物を入れて 排泄して、仕事して、寝て そういうことを毎日繰り返さなくちゃいけないのがすごく面倒くさいなって思っ。」など。

こういう発言から室井さんは性欲と食欲に対して、煩悩的見方じゃなくて、なんかちょっと悟っているような見方しているなって感じたんです。東洋大学教授の森章司氏は著書『仏教的ものの見方 仏教の原点を探る』国書刊行会の中で、仏教のものの見方の基本は「あるがまま」を「あるがまま」に見ることにあると説明しているんですが、室井さんのセックスに対する見方は、まさに仏教的見方といえるのではないのでしょうか？最も古い仏典といわれるスッタニパータにも「愛欲があると汚いものでも綺麗に見える」という言葉が書かれていたと思います。室井さんの見方は愛欲を離れ、客観的、あるがままの見方をしているんだと思います。室井さんは男性経験も豊富だと思うので、飽きるほど経験した結果、そういう視点が生まれてきたのかもしれないね。オウムでセックスの経験のあまりない若者が出家して禁欲しても欲求不満になったり、悶々としてかえって強い欲求が出たりして、若い人の性欲の破戒が多かったですね。やっぱり飽きるまで経験したほうが離れられるんじゃないかな？

元サマナ

## 「素敵な言葉」

窓口の2006. 3. 30日記より

<http://life7.2ch.net/test/read.cgi/psy/1142411572/>より

まあ、2チャンネルは転載自由だったと思うので、ご容赦を。  
実に理解しやすいなあ、と思い。コピペですいません。

-----  
552 : 498 : 2006/03/30(木) 00:07:53 ID:Y+Vqyh39

カルマってもんを考えてみようか？

俺はアーレフの教学ではなく、手塚治虫の「ブッダ」というマンガの方が参考になったんだけど。

「運命には変えられるものと、変えられないものがあると。」これがマンガに書かれていた事。

でもアーレフでは為したことは必ず返る。つまり結果が最初から決まっているということだ。だから、サリンの被害にあった人も、そうなるべくしてなったのであって、これはカルマ＝運命だと。

それは違うんじゃないの？変えることもできたんだよ。

サリンを撒かないという行為によって。殺さないという行為によって・・・その行為を選択する自由は常にあったわけ。

右にいくか左に行くか人生のハンドルさばきまでカルマ＝運命によって固定されているわけじゃない。そこまでがんじがらめなら、人間は岩にこびりついたコケみたいな生き方しかできんだろ人間の運命は一本道じゃないんだ。

## 拉 致 事 件

5月27～28日は、拉致事件の調査で、20人ほどで、釧路、網走と行ってきました。地元新聞には記事が出た。

それにしても、子どもさんが突然いなくなった親御さんの悲嘆。坂本のご両親、奥さんのご両親を重ね合わせた。そして、坂本事件の時は、随分長かった気がしたが、1989年から1995年の6年間だったんだ、と思った。

何とかしたい、と思う。確かにあまりに不自然。

夜、関係者のみだからいけるのだけれど、カラオケでも、「なだそうそう」はやはり誰も歌わなかった。自分はまだお会いしたことはないけれど、やはり曾我さんの歌だと思う。曾我さんのお母さんは、共に拉致されて、まだ見つかっていない。曾我さんは、お母さんは日本にいるものだと思って帰ってきたのだった。

多くは、私と同じ世代。

北朝鮮政府は、実にひどいことをしてきた。

### 目次

- 1 P～ 窓口寄稿 「ポーシャさん＝平田信さんへ」
- 3 P～ 手記 「マヌ法典と仏典の類似性」
- 8 P～ 手記 「今、思うこと」
- 9 P 手記 「オウムの子供たちの学力」
- 10 P 手記 「室井佑月」
- 11 P 2ちゃんねる掲示板から転載 「素敵な言葉」
- 12 P 窓口 「拉致事件」

かなりや

西條 八十

唄を忘れた金糸雀は、

後の山に棄てましょか

いえ、いえ、それはなりませぬ

唄を忘れた金糸雀は、

背戸の小藪に埋けましょか

いえ、いえ、それはなりませぬ

唄を忘れた金糸雀は、

柳の鞭でぶちましょか

いえ、いえ、それはかわいそう

唄を忘れた金糸雀は、

象牙の船に、銀の櫂

月夜の海に浮ければ

忘れた唄をおもいだす

『赤い鳥』(大正七年一月号)  
岩波文庫『日本童謡集』より

◎ カナリヤは歌を思い出す手助けをする。

◎ カナリヤは自分自分の歌(考え)を歌う。

◎ カナリヤは歌を歌えなくなった鳥を捨てるのではなく、温かく見守る。

(地球の揺りかごで)

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>